

## 私の心の友

中 一

「遊ぼう。」

私は幼い頃、ある男の子の家に曾祖母と姉と行くのが保育園帰りの日課だった。その友達は、重度の障害のある人で寝たきり。車いすも固定していないと倒れてしまう程。あとから母に聞いておどろいたのだが、同年代だと思っていた彼は、十才だったようだ。生まれつき、小児まひで体も保育園児と同じ位で、私と同年代かと思つて仲よく遊んでいた。彼は、体が不自由で話もほとんどできないので、ままごとをする時もいつも私が主導権をにぎっていた。となりで笑っているだけ。一人で遊んでいるみたい。両親が共稼ぎで、曾祖母と姉の三人で過ごすのもつまらないので、ジュースとおかしをもらいに行っていたようなものだった。しかし、大きくなるにつれて、私にも保育園の友達と遊びたいという思いが芽生えてきた。その彼の家に行くのがゆううつになり、足が

遠のいた。しばらくしてスーパーでおばさんにバッタリ会った。

「かわいそうに哀れな目で周りの人は近づいてこない。でもあなたは、遊ぼうって毎日のように来てくれて、何もできないあの子に笑顔をくれたことを、本当にうれしく思っているのよ。また、遊びに来てやってね。」

私は、今までの自分がはずかしいと思う。体が不自由で寝たきりの彼は、ゆいいつの友達の私と姉を心待ちにしていたくれたのに。

それから、また遊びに行くようになった。保育園で習ったおゆうぎや歌などをみせたり、手話を覚えてくると指の動かない彼の指をとり、先生になった気分で教えたりした。体調がいい時には、運動会や生活発表会にも来てくれた。心ない友達が、

「何あの子、誰の友達？かわいそう。」  
と言っていた。私は胸をはって、

「私の友達。」

と言った。かわいそうなんかじゃない。彼なりに楽しいことを精一杯表現できる素晴らしい子だよ

と心の中でつぶやいた。

おばさんが、

「分けへだてなく接してくれるあなたをうれしく思う。」

と言ってくれたことを本当に光栄に思う。

障害のある人、障害のない人という見えないかべを作らず、誰に対しても偏見をもたず、困っている人がいたらかわいそうではなく、「大丈夫ですか？何かお手伝いしましょうか？」と声をかけたと思う。

中学生になり、部活も勉強も大変だけど、私は、自分自身が精一杯できることを頑張ろうと思う。だから、私は弱音をはかないと心に決めた。私の面倒をみてくれた、曾祖母も彼も他界してしまったけれど、二人の分も一生けん命生きていこうと思う。